

訪問機材今昔と 現場で欲しい物

飯島美智子



(いじま・みちこ)
ICDフェロー
いじま歯科

歯科医師として、外来診療の傍ら訪問歯科診療を始めて25年ほどになる。

始めた頃は、まだ訪問歯科という分野も手探り状態、介護保険もなかった時代である。

切削機材（ポータブルユニット）も今ほどコンパクトではなく、コンプレッサーなどはとてもではないが重たく、持ち運びが難しいものであった。もちろんとても高額なものでもあった（図1）。

それでは訪問診療などは普及しないはず。歯科医師たちは、二の足を踏むはずである。

次に出てくるのは、患家の掃除機をお借りして、バキューム装置のコンプレッサー代わりとするものであった。これは掃除機を借りる手間さえ考えなければかなり手軽なものだった。「え～!! 掃除機につなぐものは汚いではないか」と思われるかもしれないが、もちろん直接口腔内に関係するわけではなく、汚水を溜めておく装置の上部につなぎ、吸引力のみ利用する方式のものである（図2）。



図1 オサダポータブル初期型



図2 オサダ掃除機利用型



図3 オサダポータブルデージー

しかし、徐々に俗に言う普通の掃除機を持たない家が増えてきて、現場でポータブルユニットを使えない状況になり、歯科機材のメーカーはバキュームを単体のコンプレッサー付きの箱型のものにした。

吸引力はそこそこ出ていたが、いかんせん箱型コンプレッサー付きバキュームは大きく、これに加えてポータブルユニット本体を持ち運ばなければならないため、機動性に欠けるものと思われた。さらに、この頃になると使う側も（私自身）もっと使い勝手の良いものにならないかと欲が出てきた。

訪問歯科診療は基本的に立位で行うため、床面に近いところにあるポータブルユニットのハンドピース、超音波スケーラーやさらに3wayシリンジ等を置いてあるフックに手を届かせるためには腰を曲げなくてはならず、何度もこれを繰り返すことが疲労につながることをメーカーに訴えた。もちろん全体の重量を軽くすることも含めてである。



図4 オサダやすらぎピロー

そしてできたものがハンドピースを立ったまま手にすることができるポータブルユニットである。コンプレッサー部分とのセパレート方式で、女性でも両手を使えば運べるものであった（図3）。

しかしこれとてもまだ改良の余地は多くあると考え、メーカーにさらに訴えていくつもりである。

他にも訪問歯科診療を行っていて、絶対に必要と思われたものは、頭部の固定（いわゆるヘッドレスト代わりになるもの）ができるものである。

患者さんは寝たきりの人ばかりではなく、意外に患者さんでは車椅子上であったり、リビングの椅子であったり座れる状態の人も多い。その際にどんな椅子でも簡単に、しかも持ち運びが楽な軽い安価なものを作ってもらわなければならないと思われた（図4）。

さらに義歯等を削った際の削りカスを散らさない袋なども訪問の現場では必要である。幸いこれら現場からの意見がメーカーに届き、種々の物が実際に製作され販売されている。国が在宅にシフトした現在、臨床現場で訪問歯科診療を行っている歯科医師たちの一助になることができれば幸いである。